

エレミヤ書9-11章 「神を知らない神の民」

1A 嘆きの声 9

1B 欺き続ける民 1-9

2B 知恵なき民 10-16

3B 主を知る誇り 17-26

2A 偶像の愚かさ 10

1B 木工の作品 1-16

1C 空しい慣わし 1-7

2C 神々への裁き 8-16

2B 立ち切られる天幕 17-25

3A 契約を破る民 11

1B シナイ契約 1-8

2B 祈りを聞かれない主 9-17

3B エレミヤ殺害の陰謀 18-23

本文

エレミヤ書9章を開いてください。私たちの学びは、7章から始まっている「主の宮における説教」の続きであります。

1A 嘆きの声 9

1B 欺き続ける民 1-9

9:1 ああ、私の頭が水であったなら、私の目が涙の泉であったなら、私は昼も夜も、私の娘、私の民の殺された者のために泣こうものを。9:2 ああ、私が荒野に旅人の宿を持っていたなら、私の民を見捨てて、彼らから離れることができようものを。彼らはみな姦通者、裏切り者の集会だから。9:3 彼らは舌を弓のように曲げ、真実でなく、偽りをもって、地にはびこる。まことに彼らは、悪から悪へ進み、わたしを知らない。…主の御告げ。…

エレミヤが、悲しくて悲しくて、涙が出てくるのですが、頭がみんな水のバケツだったらもっと泣こうものを、と嘆いています。これは、エルサレムの人々が神に対して背を向けているのですが、背を向けているから、悔い改めて、向きをかえて主に立ち帰りなさいという神の言葉を伝えているのに、一向に意を解さない彼らがいたからです。そしてバビロンが押し寄せているのに、「主はシオンにおられないのか。」と悲しんでいるのです。いいえ、主がおられないのではないのです、主はおられるのです。彼らが外国の神、刻んだ像を拝んでいるから、そのことに神は怒りを現わしておられるのですが、それを認めずに、「私たちはまだ救われたいではないか。」と、いつまでも、いつまでも主を仰ぎ見ることを拒んでいることに対して、嘆いています。

そしてさらにエレミヤは、偽りで身を固める彼らのことを描いています。それはそのはずです、神こそが真理であり、神の言葉を受け入れないままであれば、言葉においても、行ないにおいても偽るしかなくなるでしょう。イエス様がエルサレムに行かれて、そこにいるユダヤ人と議論されて、そして彼らはイエス様を死刑にするためにあらゆる偽証をし、またサンヘドリンについての自分たちの掟も破って、イエス様を有罪にしたのです。自分が罪を犯しているのを認めないで、偽りから偽りに身を固める人について、見るに堪えませんね。エレミヤも、彼らから離れたい気持ちを言い表しています。

9:4 おのおの互いに警戒せよ。どの兄弟も信用するな。どの兄弟も人を押しのけ、どの友も中傷して歩き回るからだ。9:5 彼らはおのおの、だまし合って、真実を語らない。偽りを語ることを舌に教え、悪事を働き、依然として悔い改めない。9:6 彼らはしいたげに、しいたげを重ね、欺きに欺きを重ねて、わたしを知ろうとしなかった。…主の御告げ。…

神の言葉を拒めば、真実の中に留まることはできません。自分自身を欺き、また他者に自分を見せないで、欺く生活に入っていきます。こうやって兄弟であるのに、ユダヤ人なのに、互いに欺き、虐げることを行なっていくのです。ヨセフスは古代誌という本を書いています。バビロンに包囲されていた時のエルサレムは、ユダヤ人がユダヤ人に盗みを働くなど、バビロン人からではなくユダヤ人から虐げられていたのです。そして、ここで今日の聖書箇所がでてきました。「わたしを知ろうとしなかった」と言っています。主ご自身を知ることによって自分を明け渡していくことをしていませんでした。

9:7 それゆえ、万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らを溶かしてためす。いったい、わたしの民の娘に対し、ほかに何ができようか。9:8 彼らの舌はとがった矢で、欺きを語る。口先では友人に平和を語るが、腹の中では待ち伏せを計る。9:9 これらのために、わたしは彼らを罰しないだろうか。…主の御告げ。…このような国に対して、わたしが復讐しないだろうか。」

「彼らを溶かしてためす」と主は言われますが、これは彼らの心の内がいかに汚れているかを明らかにするということです。ここでは、口では平和を語りながら、相手を貶めようとしている姿が書かれています。主に試される時に、人は自分の汚れが表に出てきます。ユダヤ人たちが、イエス様が奇蹟をたくさん行なわれた時に、「この人は、ただ、悪霊どものかしらベルゼブルの力で、悪霊どもを追い出しているだけだ。(マタイ 12:24)」と、聖霊に対する冒瀆の言葉を吐きました。

2B 知恵なき民 10-16

9:10 私は山々のために泣き声をあげて嘆き、荒野の牧草地のために哀歌を唱える。そこは、焼き払われて通る人もなく、群れの声も聞こえず、空の鳥から家畜まで、みな逃げ去っているからだ。9:11 わたしはエルサレムを石くれの山とし、ジャッカルの住みかとする。ユダの町々を荒れ果てさせ、住む者もなくする。

バビロンによって荒らされた姿を幻の中でエレミヤが見ています。それを主も、確かに無人地帯のようになると強調しておられます。

9:12 知恵があつて、これを悟ることのできる者はだれか。主の御口が語られたことを告知らせることのできる者はだれか。どうしてこの国は滅びたのか。どうして荒野のように焼き払われて、通る人もないのか。9:13 主は仰せられる。「彼らは、わたしが彼らの前に与えたわたしの律法を捨て、わたしの声に聞き従わず、それに歩まず、9:14 彼らのかたくなな心のままに歩み、先祖たちが彼らに教えたバアルに従って歩んだ。」9:15 それゆえ、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「見よ。わたしは、この民に、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。9:16 彼らも先祖たちも知らなかった国々に彼らを散らし、剣を彼らのうしろに送り、ついに彼らを絶滅させる。」

エレミヤは、12章において、やはり誰か、自分が語っている神の御言葉について、だれか悟る人はいないのか、知恵のある人はいないのかと自問するように尋ねています。このような荒廃した町になってしまうという一大事の時に誰もいないのかと言っているのですが、誰もいないのです。主は、もう一度明確に、彼らが律法を捨てて、御声に聞き従わないで、偶像を拝んだからだと語られます。

そして主はその結果として、「苦よもぎ」を食べさせると言われます。バビロンに捕え移されるその苛酷な経験がそのようなものだと言っておられます。「苦よもぎ」は、麻酔としても使われますが、基本的に精神攪乱をももたらすことのできる毒草です。つまり気が狂うような、非常に辛い経験を、「苦よもぎ」「毒の水」を摂取することとして言い表しています。黙示録にも、7章に七つのラツパの災いで大きな星が地上に落ちてきて、水源が汚れたために水を飲んだ者たちが死んでしまうという出来事が起こります。この星の名を、「苦よもぎ」と呼んでいます(黙示 8:11)。

3B 主を知る誇り 17-26

9:17 万軍の主はこう仰せられる。「よく考えて、泣き女を呼んで来させ、使いをやって巧みな女たちを連れて来させよ。」9:18 彼らをせきたて、私たちのために嘆きの声をあげさせ、私たちの目に涙をしたたらせ、私たちのまぶたに水をあふれさせよ。9:19 シオンから嘆きの声が聞こえるからだ。ああ、私たちは踏みにじられ、いたく恥を見た。私たちが国を見捨て、彼らが私たちの住まいを投げやったからだ。9:20 女たちよ。主のことばを聞き、あなたがたの耳は、主の言われることばを受けとめよ。あなたがたの娘に嘆きの歌を教え、隣の女にも哀歌を教えよ。9:21 死が、私たちの窓によじのぼり、私たちの高殿にはいつて来、道ばたで子どもを、広場で若い男を断ち滅ぼすからだ。9:22 語れ。..主の御告げはこうだ。..人間のしかばねは、畑の肥やしのように、刈り入れ人のあとの、集める者もない束のように、横たわる。

今、エルサレムには、人間の屍が転がっています。誰も嘆く人がいません。それで、エレミヤは先ほどは自分の頭が水だったらと言っていましたが、今は嘆きの女たちに来てもらい、この町に対

して哀歌を歌ってほしいと願っています。この「泣き女」は、当時いたプロの泣き屋のことを表しています。葬儀の時に、遺族はお金を払って、泣くことを商売にしている人々を雇います。この人たちが激しく泣き、死者を悼んでいるのを見て、親族の人や知人・友人が訪問したときに、その人たちも心動かされて泣きやすくするためです。イエス様が、すでに死んでいるラザロのところに行かれた時も、ユダヤ人の人たちが泣いていましたね。ヤイロの娘の時も多くの人が泣いていました。

9:23 主はこう仰せられる。「知恵ある者は自分の知恵を誇るな。つわものは自分の強さを誇るな。富む者は自分の富を誇るな。9:24 誇る者は、ただ、これを誇れ。悟りを得て、わたしを知っていることを。わたしは主であって、地に恵みと公義と正義を行なう者であり、わたしがこれらのことを喜ぶからだ。主の御告げ。9:25 見よ。その日が来る。主の御告げ。その日、わたしは、すべて包皮に割礼を受けている者を罰する。9:26 エジプト、ユダ、エドム、アモン人、モアブ、および荒野の住人でこめかみを刈り上げているすべての者を罰する。すべての国々は無割礼であり、イスラエルの全家も心に割礼を受けていないからだ。」

主を知ることこそを、誇りとしなさいと言われていています。午前礼拝でお話しましたが、これには文脈があります。その次に出てくる国々への裁きなのです。26 節にある、エジプトを筆頭とする国々が書かれています。彼らは無割礼であるとあります。つまり、神との契約が結ばれていないのです。神を信じていないし、関わりを持っていません。けれども、バビロンに対抗するためにエジプトに助けを求めて、エドム人、アモン人、モアブ人、またこめかみを刈り上げているのはアラビア人でしょうか、彼らはその助けを受けました。それで、エジプトがバビロンによって倒されるので、自分たちも倒されるのだ、ということです。

しかし、その中に 26 節ですが「ユダ」がいます。これが大きな問題でした。ユダは神を知っていなければいけない者たちだったのです。周りの国々と異なり、神の恵み、公義、正義を知って、その中に生きていなければいけなかったのです。しかし、知恵と力、また富をエジプトに頼っていました。そのために彼らは知恵がある、力がある、富があると言って誇ったのです。それでこれらのものを誇るのではない、と言っています。そして彼らは肉の包皮は切っているかもしれないけれども、他の無割礼の者たちと何ら変わりなく、裁かれるのだと言っています。

ここで私たちが適用させなければいけない原則がありますね。私たちも、神を知らない人々に取り囲まれています。私たちが、神を知っていることによって聖なる民、他の人々と区別することができる民となっているかどうか？であります。

2A 偶像の愚かさ 10

そして主は 10 章において、主の宮の中でエレミヤが語っている、その最後の言葉を与えられません。それは、彼らが陥っている偶像礼拝についてであります。

1B 木工の作品 1-16

1C 空しい慣わし 1-7

10:1 イスラエルの家よ。主があなたがたに語られたことばを聞け。10:2 主はこう仰せられる。「異邦人の道を見習うな。天のしるしにおののくな。異邦人がそれらにおののいていても。10:3 国々の民のならわしはむなしだからだ。それは、林から切り出された木、木工が、なたで造った物にすぎない。10:4 それは銀と金で飾られ、釘や、槌で、動かないように打ちつけられる。10:5 それは、きゅうり畑のかかしのようで、ものも言えず、歩けないので、いちいち運んでやらなければならない。そんな物を恐れるな。わざわざいも幸いも下せないからだ。」

かつてモーセも、周りの異邦人の慣わしにならうなという神の戒めを与えました(申命 7:1-11)。興味深いことに、それらのものは魅力が出てきます。また、エジプトにあるような神々は、そこには学問があり、富や力もありますから、ますます魅力的に思えたことでしょう。けれども、主はそれゆえにいかにそれが愚かなものかを教えておられます。人が作ったもの、こしらえたものであり、動くことはできず、自分で動かしていかなければいけないものです。

ところでなぜ、こうも神の民が偶像に引かれてしまうのでしょうか？パウロがローマ 1 章でこう言いました。「1:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたち似た物と代えてしまいました。」人間、鳥、獣、這う者はすべて神の造られたものです。それらはみな、神の栄光を反映しており、神に栄光が帰されていくものです。けれども、偶像礼拝とは、神のくださった賜物を、神以上に大事にすることです。神がおられるからこそ、それらの恵みがあるのに、その祝福そのものを第一に求めるとそれが偶像となります。ですから、それ自体は良いものです。しかし、神の前にそれを置けば、それは偶像となります。「わたしの前に、他の神々があってはならない。」と主が言われた通りです。ですから自分のしなければいけないこと、自分のしたいこと、それが神への献身に優先させるものなら、それが偶像となります。

10:6 主よ。あなたに並ぶ者はありません。あなたは大いなる方。あなたの御名は、力ある大いなるものです。10:7 諸国の民の王よ。だれかあなたを恐れぬ者がありませんか。それは、あなたに対して当然なことです。諸国の民のすべての知恵ある者たちの中にも、そのすべての王国の中にも、あなたと並ぶような者はいないからです。

偶像礼拝というのは、何でやってしまうのかと言いますと、ここでエレミヤが主のすばらしさをほめたたえているところに理由を見付けることができます。それは、神のすばらしさ、神の力強さ、その恵みなど、生ける神に対する意識が薄くなった時にすぎってしまうのです。人は必ず、何かを礼拝したいと思っています。ですから、まことの神を神として見上げていない時に、他の別のものを偶像にしてしまいます。

さてここでは、エレミヤは諸国の民の王と繰り返しています。なぜならば、ユダは今、諸国に取り

囲まれており、かつその国々にはそれぞれの神がいたからです。しかし、それらの神は実は存在せず、人の手で作ったものです。そして、その国々をも治めている王であります。ですから、それらの国々、神を信じていない人々をも神は支配しておられるのです。

2C 神々への裁き 8-16

10:8 彼らはみなまぬけ者で愚かなことをする。むなしい神々の戒め・・それは木にすぎない。10:9 銀箔はタルシシュから、金はウファズから運ばれる。偶像は木工と金細工人の手の作。その衣は青色と紫色、これらはみな、名匠の作。10:10 しかし、主はまことの神、生ける神、とこしえの王。その怒りに地は震え、その憤りに国々は耐えられない。10:11 あなたがたは、彼らにこう言え。「天と地を造らなかつた神々は、地からも、これらの天の下からも滅びる。」と。

タルシシュは、スペインの南部、鉱物が採掘できる場所です。そしてウファズは、アラビアの方面にあるところだと言われていますが、金が採掘されます。衣が「名匠の作」とありますが、そうですね芸術的、美術的に見れば、高度なものがたくさんあります。日本の寺などでも、すばらしい出来の建築物や衣服があります。けれども、その礼拝対象はあくまでも木なのです。どんなにきらびやかでも、単なる木にしかならないということを人間は愚かにも悟ることができません。

そして 11 節は非常に興味深い神の発言です。この言葉はアラム語で書かれています。10 節まで、また 12 節からはヘブル語で書かれています。ここだけはアラム語なのです。アラム語は、当時の貿易用語で、世界共通語的に使われていたものです。つまり主は、ここで言語を変えられて、イスラエルに対してでなく、諸国に宣言することを望まれてお語りになったのです。

10:12 主は、御力をもって地を造り、知恵をもって世界を堅く建て、英知をもって天を張られた。10:13 主が声を出すと、水のざわめきが天に起こる。主は地の果てから雲を上らせ、雨のためにいなずまを造り、その倉から風を出される。10:14 すべての人間は愚かで無知だ。すべての金細工人は、偶像のために恥を見る。その鑄た像は偽りで、その中に息がないからだ。10:15 それは、むなしいもの、物笑いの種だ。刑罰の時に、それらは滅びる。10:16 ヤコブの分け前はこんなものではない。主は万物を造る方。イスラエルは主ご自身の部族。その御名は万軍の主である。

天地を造らなかつた神々は滅びると宣言して、それから天地を造られた神がどのように天地を造られ、また雨をつくられているかを語っています。私たちは天地を見てわかる神のご性質は、力と知恵です。これだけのものを造るのは相当の力、いや無限大の力を要します。そしてこれだけ秩序をもって世界が成り立つには、とてつもない知性が必要になります。そして、ヤコブの分け前、つまり神によってイスラエルは豊かな祝福を受けるのです。偶像なんかではないのです。

2B 立ち切られる天幕 17-25

10:17 包囲されている女よ。あなたの荷物を地から取り集めよ。10:18 まことに主はこう仰せられ

る。「見よ。わたしはこの国の住民を、今度こそ放り出し、彼らを悩ます。彼らに思い知らせてやるためだ。」

偶像と天地を造られた神を対比していましたが、ここで今の状況に戻ります。ユダの民は偶像を選んでしまいました。それで、捕囚の民となってしまいます。そして、エレミヤは今度はそれを自分のこととして受け入れていきます。

10:19 ああ、私は悲しい。この傷のために。この打ち傷はいやしがたい。そこで、私は言った。「まことに、これこそ私が、負わなければならない病だ。」10:20 私の天幕は荒らされ、すべての綱は断ち切れ、私の子らも私から去って、もういない。再び私の天幕を張る者はなく、私の幕屋を建てる者もない。10:21 牧者たちは愚かで、主を求めなかった。それで彼らは栄えず、彼らの飼うものはみな散らされる。

天幕が荒らされるというのは、まさにマイホームが荒らされるというようなインパクトで話しています。自分の最も身近にある存在であり、自分自身が荒らされてしまうということです。そして牧者たちといっていますが、指導者らのことです。彼らを養うべき人々が、主を求めていないのでかえって散らしています。

10:22 聞け、うわさを。見よ。大いなる騒ぎが北の地からやって来る。ユダの町々を荒れ果てた地とし、ジャッカルに住みかとするために。10:23 主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。10:24 主よ。御怒りによらず、ただ公義によって、私を懲らしてください。そうでないと、私は無に帰してしまうでしょう。10:25 あなたを知らない諸国の民の上に、あなたの御名を呼ばない諸氏族の上に、あなたの憤りを注いでください。彼らはヤコブを食らい、これを食らって、これを絶滅させ、その住まいを荒らしたからです。

主はバビロンが来ること、エルサレムが荒廃することを定めておられることを、エレミヤはそうならないように執り成しをしています。しかし、彼らのために祈ってはならないとまで、7章16節で主は言われていました。しかしエレミヤは、彼らのためではなく、自分自身のことのようにして祈りました。彼らのために祈ってはいけないのであれば、では私自身のことのようにして祈ります、という感じです。彼は彼らを愛しているがゆえ、まるで自分が罪を犯したかのように話しているのです。愛が身代わりに罪を負う、つまりイエス様と同じような姿勢を取らせました。

23節では、人のはかなさについて話しています。全てが主の御手にあります。「人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。(20:24)」と箴言にあるとおりです。そして、24節には懲らしめによらなければ、たちまち滅んでしまうと訴えています。永遠の滅びではなく、懲らしめによってそれで立ち上がることができます。神が滅ぼそうと思えば、一瞬のう

ちにも滅びるからです。「1コリント 11:32 しかし、私たちがさばかれるのは、主によって懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。」そして、25 節は、バビロンに捕え移された後のことに行なってほしいと願っていることです。エレミヤ書の最後のところで諸国に対する神の裁き、特にバビロンに対する永遠の裁きが書かれています。主はバビロンをユダに対するご自分の器として用いられたのですが、彼らはそれをよいことに、ほしのままにユダを虐げました。ゆえに、主はバビロンを永遠に滅ぼされます。

何と言ったらよいでしょうか、神が祈ってはならないと言われたのに自分にして祈り、そして、神が滅ぼすと言われているのに、懲らしめにして永遠の滅ぼすようなことはしないようにと祈り、そして、神の名を呼ばない者たちには裁きを下してくださいと正しい訴えをしています。こうやって、主に対して、ぎりぎりをお願いをしているのです。こういうせめぎあいのような祈りですが、こうやって祈れば祈るほど、主の御心の中に入っていくことができるのでしょ

3A 陰謀を計る民 11

こうやって、主の宮における説教の部分は終わりました。次は、「モーセを介してのシナイ契約」についての説教です。11 章と 12 章に書かれていますが、今日は 11 章だけにしたいと思います。

1B シナイ契約 1-8

11:1 主からエレミヤにあったみことばは、こうである。11:2 「この契約のことばを聞け。これをユダの人とエルサレムの住民に語って、11:3 彼らに言え。イスラエルの神、主は、こう仰せられる。この契約のことばを聞かない者は、のろわれよ。11:4 これは、わたしがあなたがたの先祖をエジプトの国、鉄の炉から連れ出した日に、『わたしの声に聞き従い、すべてわたしがあなたがたに命ずるように、それを行なえ。そうすれば、あなたがたはわたしの民となり、わたしはあなたがたの神となる。』と言って、彼らに命じたものだ。11:5 それは、わたしがあなたがたの先祖に対して、乳と蜜の流れる地を彼らに与えると誓った誓いを、今日あるとおりに成就するためであった。」そこで、私は答えて言った。「主よ。アーメン。」

エレミヤがこの預言を行なったのは、ユダの王ヨシヤが死に、エホアハズまたエホヤキムが王となっていた時のこと、あるいはヨシヤの存命中に既に起こっていたことです。ヨシヤ王のときに、長いこと無視されていたモーセの律法の巻き物を、神殿の中で発見しました。列王記第二 22 章に、ヨシヤが律法の言葉を聞き、衣を裂いて、自分たちがことごとく主の命令に違反して、それで主の憤りが激しいことを悟りました。それから、フルダという女預言者のところに行きましたが、彼女もその律法の言葉はそのまま成就すると預言しました。けれども、「わたしもまた、あなたの願いを聞き入れる。(2歴代 34:27)」という言葉をかけられました。彼が心を痛め、主に祈ったからです。その律法の書に書かれていたのが、ここでの内容です。

エレミヤは、威勢よく「アーメン」と答えています。彼は、同年代のヨシヤの行なう宗教改革をとて

も喜んでいただことでしょう。彼との間に友情もあったかもしれません。ヨシヤがエジプトの王ネコとの戦いで早くこの世を去った時に、「エレミヤはヨシヤのために哀歌を作った。(2歴代 35:25)」とあります。

11:6 すると主は私に仰せられた。「これらのことばのすべてを、ユダの町々と、エルサレムのちまたで叫んで、こう言え。『この契約のことばを聞いて、これを行なえ。』11:7 わたしは、あなたがたの先祖をエジプトの国から導き出した日に、彼らをはっきり戒め、また今日まで、『わたしの声を聞け。』と言って、しきりに戒めてきた。11:8 しかし彼らは聞かず、耳を傾けず、おのおの悪いかたくなな心のままに歩んだ。それで、わたしはこの契約のことばをみな、彼らに実現させた。わたしが行なうように命じたのに、彼らが行なわなかったからである。」

基本的に、これはフルダがヨシヤに語った預言と同じ内容です。契約を神が与えられましたが、それを長いこと彼らは破り、悔い改めないままで歩んできた。だから、その契約に書かれている呪いの言葉を彼らに成就させるというものです。モーセが申命記の最後、自分の死ぬ前に宣言したのはその呪いでした。飢饉が来て、敵に襲われて、そして外国の軍隊によって都が破壊され、飢餓で空腹で赤ん坊までも食い、そして最後は約束の地から引き抜かれるというものでした。これをエレミヤが語り始めました。

2B 契約の違反 9-17

11:9 ついで、主は私に仰せられた。「ユダの人、エルサレムの住民の間に、謀反がある。11:10 彼らは、わたしのことばを聞こうとしなかった彼らの先祖たちの咎をくり返し、彼ら自身も、ほかの神々に従って、これに仕えた。イスラエルの家とユダの家は、わたしが彼らの先祖たちと結んだわたしの契約を破った。」

ここからが 11 章の濃い中身になります。この「謀反」は、「陰謀」とも訳すことのできる言葉です。ヨシヤ王の抜本的な宗教改革において、彼らはその心では偶像礼拝をそのまま続ける企みを持っていました。計画的に、意図的に神の命令に聞き従わないで偶像礼拝をしようとしていたのです。

11:11 それゆえ、主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らにわざわいを下す。彼らはそれからのがれることはできない。彼らはわたしに叫ぶだろうが、わたしは彼らに聞かない。11:12 そこで、ユダの町々とエルサレムの住民は、彼らが香をたいた神々のもとに行つて叫ぶだろうが、これらは、彼らのわざわいの時に、彼らを決して救うことはできない。11:13 なぜなら、ユダよ、あなたの神々は、あなたの町の数ほどもあり、あなたがたは、恥ずべきものための祭壇、バアルのためにいけにえを焼く祭壇を、エルサレムの通りの数ほども設けたからである。」

ヨシヤの宗教改革の時から既に密に行なっていたのでしょうか、それとも彼が死んだ直後に開始したのでしょうか、いずれにしてもエルサレムの通り程の多くの偶像を設けていたとあります。

神殿の丘の南にあるダビデの町で考古学の発掘が盛んに行なわれていますが、エレミヤの時代のエルサレムの町も発掘されているそうです。そこには、数限りない偶像が家々から出てきているとのこと。至るところ偶像だらけだったのです。

そして、彼らは偶像を拜んでいるのですから、当然ながら神の御心に反することを行なっているわけで、バビロンから救ってほしいという願いは聞かれません。そして、自分たちの神々に叫んでも、聞かれません。これらは元々、祈りを聞けないのです。単に木や石でできていますから、無理です。ここが私たちの神と偶像の違いです。神は祈りを聞かれる方です。御心にしたがって祈りを聞いてくださいます。

11:14 あなたは、この民のために祈ってはならない。彼らのために叫んだり祈りをささげたりしてはならない。彼らがわざわざに会ってわたしを呼ぶときにも、わたしは聞かないからだ。11:15 わたしの愛する者は、わたしの家で、何をしているのか。何をたくらんでいるのか。誓願のささげ物や、いけにえの肉が、わざわざをあなたから過ぎ去らせるのか。その時には、こおどりして喜ぶがよい。

彼らの企みが書かれています。神殿において誓願の捧げ物、いけにえの肉を捧げています。それで災いが過ぎ去ることを願っているようですが、実は同時進行でしっかりと偶像礼拝を行なっていました。そして 15 節の最後の文、「その時には、こおどりして喜ぶがよい。」ですが、おそらくこれは括弧書きにしないといけないのではないかと思います。つまり、彼らは災いが過ぎ去った時に、こおどりして喜ぼうと言っている、ということです。神が仰っているのではなく、彼らが言っていることです。

11:16 主はかつてあなたの名を、『良い実をみのらせる美しい緑のオリーブの木。』と呼ばれたが、大きな騒ぎの声が起こると、主はこれに火をつけ、その枝を焼かれる。11:17 あなたを植えた万軍の主が、あなたにわざわざを言い渡す。これはイスラエルの家とユダの家が、悪を行ない、バアルにいけにえをささげて、わたしの怒りを引き起こしたからである。」

主がこれらのことを語られているのは、愛するのをやめたからではありません。愛を拒まれたからです。「良い実をみのらせる美しい緑のオリーブの木。」と主は呼ばれています。神が愛しておられて、その裁きを宣言するというのと、嫌いになって裁きを宣言するのとでは、全然違いますね。後者は神の御心ではありません。私たちも愛する人に過ちや罪が指摘されると、そうでない人に非難されるのとでは、一発で分かりますね。

3B エレミヤ殺害 18-23

11:18 主が私に知らせてくださったので、私はそれを知りました。今、あなたは、彼らのわざを、私に見せてくださいました。11:19 私は、ほふり場に引かれて行くおとなしい子羊のようでした。彼らが私に敵対して、「木を実とともに滅ぼそう。彼を生ける者の地から断って、その名が二度と思ひ

出されないようにしよう。」と計画していたことを、私は知りませんでした。11:20 しかし、正しいさばきをし、思いと心をためされる万軍の主よ。あなたが彼らに復讐するのを私は見ることでしょう。私が、あなたに私の訴えを打ち明けたからです。

なんと、彼らは偶像礼拝を続ける陰謀を持っていただけでなく、エレミヤ自身を殺す計画も企てていました。

11:21 それゆえ、主はアナトテの人々について、こう仰せられた。「彼らはあなたのいのちをねらい、『主の名によって預言するな。われわれの手にかかってあなたが死なないように。』と言っている。」11:22 それで、万軍の主はこう仰せられる。「見よ。わたしは彼らを罰する。若い男は剣で殺され、彼らの息子、娘は飢えて死に、11:23 彼らには残る者がいなくなる。わたしがアナトテの人々にわざわいを下し、刑罰の年をもたらすからだ。」

そして自分の出身の祭司の町、アナトテにおいて彼は殺される脅迫を受けていました。恐ろしいですが、このようなことを行ないます。当時は、今もそうですが、中東では名誉殺人というものがあります。自分たちの町の面子を壊したので、親族がエレミヤを取り除こうと考えてもおかしくありません。イエス様も、ナザレの町で崖から突き落とされそうになりましたね、預言者は故郷では敬われないのです。

しかし、主はエレミヤを救われます。これは、彼を召し出される時にそう約束しておられました。20 節でエレミヤは、訴えを主に対して行ないました。自分の命について、主がなんとかしてくださいと信じました。主が救ってくださいます。使徒パウロがコリントの人たちに話した、神の慰めの言葉を紹介します。「2コリント 1:8-10 兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。」